



「天上からのクリスマスキャロル」

チャプレン 大柴 譲 治

耳を澄ませると天上からの妙なる調べが聞こえてくるような季節を迎えています。もうすぐクリスマス。闇の中に救い主の御誕生を示す星の光がさやかに輝いています。今年 2018 年は特に、4 月 28 日に東京からキャロル・サック宣教師と奈良在住の第 5 期修了生の早野潤子さんをお招きして「リラ・プレカリア（祈りのたて琴）」についてのお話を伺うことができました。「リラ」とは「豎琴」を、「プレカリア」とは「祈り」を意味するラテン語で、歌とハーブを通して看取りのケアを行うという特別な働きです。山田洋次監督による映画『おとうと』（主演：吉永小百合、笑福亭鶴瓶。2010）の一場面にはキャロルさんご自身が歌とハーブを奏でるかたちで特別出演しておられました。

リラ・プレカリアの働きは、2005 年より準備委員会が立ち上がり、その次の年からいよいよ受講生を募集しての訓練が始まりました。私もその最初から運営委員の一員として関わらせていただきました。受講生は二年間、毎日 3 時間の歌とハーブの練習を積み、週二回の講習とグループ実習とを受け続けます。12 年間で 38 名の修了生が誕生しています。嬉しいことに 9 月にはある方からるうてるホームにハーブが寄贈され（私は天国からのプレゼントと思っています）、10 月 23 日にはそれを用いて高木慶子シスターのお話に併せて早野潤子さんに生演奏をしてい

たきました。

既にこの 11 月からはホームでリラの働きが始まっています。そこでは、お部屋を個別に訪問し、その方の呼吸に合わせて歌とハーブを 20～30 分ほど奏でるという特別なケアが行われてゆきます。言葉によるコミュニケーションはありません。それは「(天上からの)音楽によるスピリチュアルケア(神のスピリットによるケア)」であると私は思っています。呼吸が楽になると共に、すべての嘆きや苦しみを忘れて不思議な安らぎと懐かしさを味わうことができる時間なのです。ゲーテのファウストではないですが、それは「時よ、止まれ。お前はそのまま美しい」と言いたくなるような天国的な至福の瞬間でもありましょう。ちょうど耳を澄ませると天使たちのクリスマスキャロルが聞こえてくるようなものですね。リラの創始者のお名前も「キャロル」さんであったことにも天の配剤を感じるのには私一人ではないことでしょう。

私にとってハーブを奏でながら歌を歌われるキャロルさんや早野さんの姿は天使のようにも見うけられます。天使がこの地上に降り立っているように思われるのです。その音色にご一緒に耳を澄ませてみませんか。お一人おひとりの上に、天からの祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。

メリークリスマス！



「歌とハープによる生きた祈り」

早野潤子

パストラル・ハープ奉仕者

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修5期修了生

このたび、月に一度程、るうてるホームの皆様へ「パストラル・ハープ」をお届けさせていただけるようになりましたことを心より感謝申し上げます。

「パストラル・ハープ」とは、心身の苦難にある方の傍らで、歌とハープによる生きた祈りを捧げる働きです。尊厳に寄り添い、「共に在る」ために、お一人おひとりの息遣いに合わせて音楽を奏でます。「あなたはそのまま、かけがえのない価値のある大切な存在、愛されている存在ですよ。」歌声とハープの響きを通して、そう伝えられますように、そしてそれがその方の魂の癒やしになりますように、と祈り求めながら。

歌っているのは、グレゴリオ聖歌やテゼの歌、世界のララバイ(子守り歌)等です。あえて日本語の歌や馴染みのある曲は用いませんが、それは言葉の意味や特定の想い出に捉われることなく、より自由に音楽に身を委ねて心の旅をしていただけたらという思いからです。

ベッドに横になってゆったりとリラックスしてお聴きいただくために、「途中で眠たくなれば、どうぞそのまま眠ってくださいと大丈夫ですよ。」とお声がけて奏で始めるのですが、実際にしばらくすると寝入られる方も多くいらっしゃいます。夢の時間にそっと息を聴き、その一瞬一瞬に合わせ奏でつつ、同時にその方の長い人生の時に思い馳せるとき、透明なカイロスの時間に包まれ、貴重な一期一会を感謝せずにはられません。

豊かな“いのちの時”に神様の限りない祝福がありますように。

どうかこの方がいちばん心安らかにいられる懐かしい場所に憩われますように。

季節はクリスマス。すべての人が愛された幼子として生まれてきたことを思いながら、出会わせていただけるお一人おひとりと、ささやかな音楽を通して、暖かな光のひとつときをご一緒できれば幸いです。

「高木慶子シスターの講演を聞いて」

軽費事業部 坂本いずみ

「ありがとうと言って死のう」、「まずあなたにとって一番辛い、人生で最も辛いこととはなんですか」と高木シスターからの問いかけに、私にとって一番辛いこととはなんだろうかと考えてみましたが、はっきりとした答えは見つかりませんでした。

「その答えがわからないでいて、最期の時に関わるなんてとんでもない」と先生。この世で一番最も辛いことを私は知らないし、そう深くは考えてこなかったことに気が付かされました。私たちは死を前にした時に何を想うのでしょうか。

人生の最期に関わる人が多い私たちの仕事です。自分の人生を肯定して、受け入れ亡くなっていただく。明日の希望が持てない時期に、生きる道筋を示し、しっかりとこの世とお別れしてもらうことを高木シ

スターは大切にされており、その中で「自分の人生は辛い事や苦しいことばかりだった。こんな人生はもう二度と繰り返したくない。」こうした思いも受け止め、患者さん一人ひとりの話しの耳を傾けられ、時には一緒になって喜び、一緒に悲しみを分かち合う時を過ごされてきました。

人生の最期を迎える時に、死を受け入れ、安心して天国へと旅立つことができるよう寄り添い、この世で自分がしてきたこと、残すこと、任せること、許されること、すべての感情と共に安心してこの世を旅立つことのできる日々を過ごすことができますように、その日々に寄り添うことができるように、これから先自分自身も振り返り続けたいと思いました。

高木シスターの講演の前に、早野さんが

ハーブ演奏を披露くださいました。ゆったり静かに流れる安らかな音楽の調べ。私はひとつひとつの音から目も耳も離せないでいました。ひとつひとつの音色に心込められた手仕事。フレーズに込められた聞き手への想い、とても繊細で美しくありました。私にとって音楽がその場にいる人に寄り添

うというイメージはあまりありませんでしたが、今回パストラルハーブの紹介と演奏を聞いて、その時に寄り添う音楽は良いものであると感じましたし、音楽の持つさらなる良さがあることを実感する機会となりました。

「法人会連合研修に参加して」

2018年8月20日・21日に『ルーテル社会福祉協会総会』が開催されました。ルーテル教会につながる社会福祉法人が一同に会します。初日は、るうてるホームで行われました。青田勇牧師による「ルーテル教会の社会福祉事業、その歴史と今後」と題された基調講演後、大柴譲治牧師・小泉基牧師・中島康文牧師による「ルーテルの社会福祉とチャプレン」をテーマにした鼎談を拝聴しました。

特養の職員としてチャプレンとの接点のひとつは、るうてるホームでの葬儀です。チャプレンは、ご利用者、ご家族、職員の心に寄り添い、想いを繋ぐパイプ役を担っているように感じます。

次に『第5回るうてる法人会連合全体研修会』が2018年8月21日・22日に、日本福音ルーテル大阪教会で開催されました。るうてる法人会連合の教会、学校法人、社会福祉法人、幼稚園で構成されています。「30年後の日本に必要とされる『私たちの

働き』とは」をテーマに様々な職種でチームを構成し、ディスカッション形式で行われました。

30年前には起こっていなかった話として、キリスト教を理念とする保育園にイスラム教徒の園児が通っており、宗教食への対応を行っているという話がありました。るうてるホームの中だけでは見えないことを知る貴重な機会でした。

最後に、教会、母子支援施設、幼稚園、老人ホームは、「何かに困った」と感じている人に対して寄り添い、支援するので、「最終的には、必要だと感じなくなるのが、人々にとって幸せになったとき」という話がありました。しかし、現実には、「困った」と感じているご利用者やご家族が目のおられます。様々な事柄を敏感に察知し、寄り添い、共に考え、その都度対応していくことが『私たちの働き』として求められていることを確認した研修でした。

「ひとつの大きな家族」～ドイツ訪問団に参加して～

今年の10月25日から9日間で、ドイツのブラウンシュバイク福音ルーテル教会(ELKB)と日本福音ルーテル教会のパートナーシップ50周年を記念する訪問団に参加しました。ノンクリスチャンである私が、るうてるホームの理念にあるキリスト教主義を理解することが目的でした。

ELKB とつながりのある社会福祉に関する施設をいくつか見学し、ほぼ毎日礼拝に参加しました。大きな礼拝は、パートナーシップ50周年記念礼拝と、宗教改革記念礼拝でした。

地域支援事業部 大野原ひとみ

特に印象深かったのは、宗教改革記念礼拝で、プロテスタントとカトリックの方々が一緒に説教されていたことです。

この訪問団で初めて「エキュメニカル」という言葉を知りました。「家」を語源として、教派を超えた結束を目指すという意味です。

施設の代表の方や教会の牧師先生、ドイツで出会った全ての方が「私たちが一つの大きな家族」という言葉を話されていました。キリスト教の考え方では、神が父で、地の全ての民は子ども。誰かが父で誰かが

母でもない。上も下もない。それは、社会福祉的には、すべての人には等しく価値があり、尊厳を持つ存在であると表現します。

一緒に過ごした日本の団員の方から、「クリスチャンでもノンクリスチャンでも関係なく、一つの大きな家族であると考えればこそ、友人の傍に「核」を置きたいと思うだろうか。」とお話くださいました。

この「一つの大きな家族」という考え方は、

自分勝手な解釈ではなく、自分も相手も同じ価値を持つ人間として前に立った時に、自分とは違う価値観を持つ人を受け入れることができます。

るうてるホームに関わる全ての人が、一つの大きな家族として、自分がその大きな家族の欠けてはならない一員であることを感じられるように、これからも努めていきたいと思いました。



後援会ご献金感謝報告

2018年7月から2018年11月までの献金合計は、646,000円ございました。多額のご献金に感謝申し上げます。今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記 ●●●●●●●●●●●●●●●●

災害とも言われた猛暑、西日本豪雨災害、大阪北部地震、北海道胆振東部地震と自然が猛威をふるう中であって、いろいろと考えられることの多かった一年でした。大小にかかわらず被害にあわれた皆さまやその関係者もおられることと思います。それぞれの場所であって、主にある癒しと慰めを祈りたいと思います。(石)

発行所 575-0002 大阪府四條畷市岡山五丁目 19番 20号

TEL 072-878-9371 FAX 072-878-5293

メールアドレス jimushitu@ruuteruhome.or.jp

振込口座番号 00910-1-41037 加入者名 社会福祉法人るうてるホーム

発行責任者 後援会長 徳野昌博